



小池辰雄記念図書室だより



小池辰雄
記念図書室

第12号 2013年4月1日

開室：10時～19時（日曜日・年末年始休）

TEL 043-235-3815 千葉県千葉市若葉区都賀3-24-8 4階

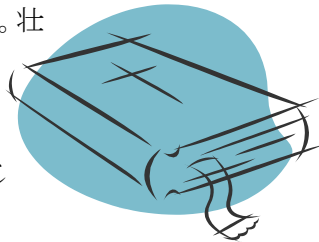
1. 初めての参加

神学と哲学

一色忠彦（千葉）

ほとんど聖書を読んだこともなく『無者キリスト』の「総序」と「第六転 十字架」だけを読んで参加しました。

水谷牧師は凄惨なイエスの磔刑の物語を神聖なオラトリオのように語ってくださいました。スピノザは「哲学の目的は真理だが、信仰の目的は服従と敬虔以外の何ものでもない」と言いました。壮大なイエスのオラトリオを魂で受け止めるのは、神学と哲学とを截然と区別した瞬間なのだろうと感じました。



2. 全国の「読む会」

信仰を「生きる」

西島邦子（帯広）

神の深い憐れみの中に全幅の信頼で全身を投じて生き語る、水谷師の「生きた証言」が我が身に迫ってきます。また、「神の秘められた奥義（愛し合い、ひとつとなる）のために招かれている」「『愛し合ってひとつとなっている恵泉塾』の有り様をそれぞれの教会にぜひ移植してほしい」との言葉は、私に神への期待を大きく抱かせるものです。

また、今所属している教会も「神が愛され、神のご栄光が顕されるために必要とされている」尊い舞台であると示され、感謝しています。私たちの小さい群れのひとりひとりに、教会を神の働きの場へと導く献身の思いを抱かせ、実行させてくださいと祈るようになりました。

「最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである」と言われる主イエスがお喜びになるように、小さき者の内にあられる主に目が開かれ、信仰を



「生きる」ことができますように。雪が解け、読書会が再会されるのを心待ちにしています。

小池辰雄記念図書室は4月から

毎週日曜日閉室とさせていただきます。

図書室だよりは今月から偶数月発行となります。

小池辰雄を読む会

●余市

2013年4月7日(日)13:30～15:00

2013年5月5日(日)13:30～15:00

(余市郡余市町豊丘町 370-9 恵泉祈りの家)

*会費：無料(自由献金)

*連絡先：0135-23-9222(木下)

●札幌

2013年4月13日(土)14:00～16:00

2013年5月25日(土)14:00～16:00

(札幌市南区川沿10条3-10-5 札幌祈りの家)

*会費：無料(自由献金)

*連絡先：011-571-2348(三ツ木)

●帯広

2013年5月30日(木)14:00～17:00

(帯広市西22条南4丁目31-1)

*会費：無料

*連絡先：0155-36-8626(西島)

●北見

*4月・5月ともお休みします。

●都賀

2013年4月20日(土)10:00～12:00

2013年5月11日(土)10:00～12:00

(千葉市若葉区都賀3-24-8 都賀プラザ5階)

*会費：1000円

*連絡先：043-235-3815(佐藤)

*準備の都合上、出席のご連絡をお願いします。

*お手洗いが大変混みます。事前におすませください。

●神戸

2013年4月21日(日)14:00～15:30

(神戸市中央区磯上通り4-1-12 神戸バイブルハウス)

*会費：500円(自由献金あり)

*連絡先：090-9256-4841(田中)

*隔月開催のため、5月はありませぬ。

*予習不要・初心者歓迎

婚約

1932(昭和7)年12月21日、小池辰雄(28歳)は、伊藤順子(21歳)と正式に婚約した。

婚約前に辰雄が用意したもの。それは、月刊誌『羔(こひつじ)』の創刊だった。11月の創刊号はマス目のある縦書きの原稿用紙(MARUZEN)を二つ折りにしたB5版・90ページ。細字の万年筆で字間を詰めて書いている。

『羔』創刊の辞に、こうある。

…今や私は、わが「永遠の愛」とともに新しき一つのいのちに甦った。この期(とき)ありてか、この小誌は生れ出でたのである。我らの生涯がいのりであるならば、これもまた我らのいのりの外何ものでもなかろう。地を去るの日まで絶ゆることなき香として天に立ち昇らんことを。聖霊とこしえに我らの導者にてあり給はんことを。

厚紙でくるみ、和綴じの本のように錐で穴をあけ、紐で綴じた。表紙に15行ほどの目次がある。

詩篇(一)第一篇～第五篇(自由訳・辰雄) いのり(一)いのり以前の問題(論文) 眠りなき夜のため(一)(原著・ヒルティ、訳・辰雄) 星のたより(一)(詩・人生のうた ロングフェロー、訳・辰雄) みどり葉(短歌・辰雄)…他。詩篇はヘブライ語から、ヒルティはドイツ語から、ロングフェローを英語からの訳。

連載形式となっており、以後毎月120～140ページとボリュームを変えていき、13号で終刊となる。1933年12月23日の結婚によって『羔』は使命を終えた。

「婚約」は一生にただ一度なされるものである。二人はこの厳粛な1年を、どれほど感謝し、神讃美したことだろう。書くことを祈りとした『羔』が証している。

『羔』の第3号(33・1月)には、「年の瀬に立ちて」と題する次の一文がある。

12月21日、我らが婚約を正式に成してみると、いよいよ、地上の生活なんかはどうでもいいと思うことが強くなった。私たちは、かのピューリタン(清教徒)らが大西洋を渡ってしまったように、イスラエルの民が紅海を越えてしまったように、この世には死んでしまったのである。磁針が北を指すように、私たちの眼がシオンの山の羔を仰ぐとき本当の眼であることを知ったのである。…こういう者を捉えて神様は、キリストのために我らに何かを要求なさる

のであろう。そして力を与えてくださるであらう。それはすべて神様がなさることであって、生まれつきの、自己を愛する自己が、どんなにがんばっても、抗することのできない力をもって、この自己を殺して、神様が、自ら男性は男性らしく用い、女性は女性らしく用いて、そのみわざをなし給うであらう。我らは正に喜びて、そのご用の道具になるべきである。後になるも前になるも夫妻の凱旋は一つである。

「婚約」は、二人がこの世には死んで、神のご用の道具となることである、と辰雄。1冊、1冊が出来上がると、妻となる人に手渡された『羔』。順子は隅々まで読んで、辰雄に手紙を書いた。二人の祈りは一つとなり、結婚の機は熟していった。細ペンの文字に托して通わせた信・望・愛。地上63年間の絆の基となった。

父は著作活動を92歳まで続け、キリスト告白誌・著作物を1,000冊以上遺したが、1冊出来上がると母に差し出していた。見返しには「順子様 おかげさまで完成。感謝！」とサインがしてあった。



日本女子大学家政科卒業の時の伊藤順子(21歳)